
迅風一些-ジンプウイッサ-

夜野朔月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迅風一些 - ジンプウイツサ -

【Nコード】

N4928E

【作者名】

夜野朔月

【あらすじ】

現時代は平成の世。俺の日常は少し周りの奴らが変わっている事以外はいたって普通で、平凡だった。そんな時代に現れたのは、350年後から来たという正体不明の未来人、カザサ。俺様主義だわ、口調が変だわ、妙な組織の一員だわで迷惑この上ないが、芯は通す強いヤツで…。軽いノリでもそれぞれの思いを持った俺たちの日常は一種の嵐！

零、プロローグ

「世は移ろい、時は流れる。文化は変化し、時世と共に巡り廻る」

誰もいない静かな夜、とは言えなかった。暗闇の中でも騒がしい雑音が鳴り響いている。人の叫び声、怒鳴り声、笑い声、泣き声……そして、機械音。全てがそこら中に響き渡っている。その場所では特に珍しい事でもないのだが、その夜は特別、全てが大きくこだましていた。

「……………」

そんな雑音の中、一つの人影が空を見上げていた。

辺りが暗いため、星は煌びやかに、月は儂げに、むしろ妖しく輝いている。

手を伸ばせばすぐにでも届きそうで、人影もまた小さく手を動かした。しかし、すぐにその手を引っ込めてしまい、人影は自分の手を見つめて頂垂れた。

まるで自分がふがないとでも言いたげで、情けないとでも思っているようだった。

その人影は高層ビルの屋上に座り込んでいる。

そこがその人影の落ち着く場所であり、何よりそのビルで一番静かな場所だった。その人影は、まるで全ての音が聞こえないかのよう

に自分の手を見つめる。

指を開け、素早く握った。

尚なおも月を仰ぎ見て。

何十分と時が過ぎた。それでも人影はじつとその場から離れない。そんな時、突然屋上の扉が開いた。

人影は特に驚いた様子もなくただ月を眺めている。

「おい、そろそろ収集がかかるぞ」

現れた人物は低い声で人影に呼びかけてみたが、人影はその場に寝転がっただけで何も言い返しては来なかった。

その様子を見た人物は、小さく舌打ちをしてなお続きを言おうとする。

「おい、」

しかし、その声は辺りの雑音でかき消されてしまった。

それほどまでに、今夜は煩わづい。

小さく嘆息をして、その人物は人影に歩み寄った。その人物もまた、月を見上げる。

「…この月も、しばらくは見納めだな」

「

人影が初めて男に口を開いた。

しかし、その声もまた、雑音によってかき消される。

丁度、金属がこすれあうような音がしたのだ。

それでも人影の隣にいる人物には聞こえたようで、小さく笑みをうかべていた。

「違いねえ」

「」

人影が小さい眩きを漏らした直後、突然風が吹いた。

人影の短い白と黒の入り交じった髪がなびき、白髪の部分が月光に照らされ銀色にも見える。人影は乱れた髪を直そうともせず、やはり月を眺めていた。

「…そろそろ、行くか」

人物の言葉に人影は静かに体を起こして、立ち上がった。

握りしめた手で髪をくしゃりとなでつけ微かに口を動かしたが、それは声にならず、本当に動かしただけのようなだった。

人影は自分に言い聞かしたかっただけなのだろう。だから、自分の隣にいる人物に聞かそうとは思わなかったのだ。

「行くとするか…」

今度は何にも邪魔されず、人影の声が空に響いた。

それを合図にしたかのように、二人は足を踏み出す。

最後に一度、月を仰いで。

一、今だからこそその平和ボケ

わからん…

俺はシャーペンを握った手に冷や汗をかきつつ、ほぼ白紙の答案用紙を見つめた。

五月下旬、雨。

俺は中間テストという名を持つ、学生であれば九割は嫌がるであろう物を受けていた。

こんなときになって思うのは、せめて二週間前から地道にテキストでも見直すべきだったな、とか、それは無理でもせめてあの公式を覚えておけば、とかいう後悔の念だけだ。

何なんだ、この意味不明な外国文字のオンパレードは？

いくら国際的な世の中になってきているとはいえ、俺は英語圏の外国に移住する気は毛頭無いし、観光ぐらいはいつか行くだろうがそれでもガイドを雇って行くだろう。

だから別に英語を勉強する必要はないんだ。

そもそも社会に出て受験英語が何の役に立つというんだ？

町で外国人に出会ったとして、俺がそれなりに英語の成績が良かったとしても、テンパる頭でどう対処しろというんだ。

所詮ジャパニーズ英語を学んだだけで意欲も何も無ければ勉強してないのと同じなんだよ。現実問題結局はその手の事に興味のある奴だけが日本外へ出て行くのだから、関係のない俺たちは勉強をする必要がない、はずだ。

よし、英語はもう捨てよう。

なんてことをテスト真つ最中に思っている俺はただの開き直ったアホ以外の何者でもない。

そうでないとしても、今回の英語は本気で捨てる。もうわけが分からんのだ。

ホワイト先生とジェーンが何やら小難しいことをペラペラ話しているのは分かるが、肝心の内容がさっぱりだ。

えー、この単語は何て読むんだ？ counts？カウンツ？知るかよ。

俺は早々とシャーペンを机の上に投げ出した。当然、テスト中なのだから話し声はしない。

時折問題をめくる音や、シャーペンの芯を出す音が聞こえるだけで、これといった異変はない。

ただ普通の、テストだった。

「なあ、今回のテストどうよ？」
「ああ？」

休み時間、暇な男子のたまり場である黒板前には俺も含めた五人が集まっていた。

「どうもこうもねえな。捨てた」
「だよなー。 “ワヒテ” って誰だよ、って話しだよな」

“ワヒテ”？ もしや、こいつはホワイト先生をワヒテと読んだのか

？ちなみにホワイトの綴りは“white”。

無理矢理ローマ字読みをすれば出来ないこともないが…。

「国城、ワヒテなんて英単語は存在しない」

そういいながら律儀に国城のポケにツツコミを入れているのは数樹かずきま学なぶという。

そいつは眼鏡をかけた長身野郎で、嫌味なぐらいに頭がいい。

おまけに顔も良いもんだから、この世の不条理さを感じずにはいられないね。

かと思えば、国城くにしろ晋語しんごのようなアホもいるわけで…いやはや、世の中つてのは理不尽でできているんだなとほとほと感心する。

「何で“W”は発音しないんだよ？」

「しているだろう。ホ“ワ”イトなんだから。というか、Hの部分はほとんど発音しない」

数樹、そんなアホにそこまで熱心に教える必要はないと思うぞ。どうせ理解しないだろうしな。

でもまあ、そんなアホの国城にも野球という取り柄があったりするわけで、人間一つはそういうところがあるというどっかの格言に共感を覚えた。

ん？じゃあ、俺はどうなるんだ？何か取り柄が一つでもあったらろ
うか。

「佐久間さくまは料理上手だよね」

そうのんびりと答えるのは技壇行述わざがきゆきのといって、口調に似合わずこれまた長身の男。

ちなみに佐久間というのは俺の名字で、本名は佐久間祐さくまゆう、一応今年で高二になった。

部活は帰宅部。その理由は特に入りたいと思う部活がなかったというところもあるが、最大の理由は技壇の言っていた“料理上手”に係する。

というのも、俺の家には俺以外に家事をしようとする奴がない。三つ上の兄貴は大学の論文だ、テストだでうまいこと逃げおおせるし、親父は顔に似合わず保育士なんかやっているせいで帰ってきた頃にはガキのおもりに疲れたなどとぬかしボタンキューだ。

ちなみに、ボタンキュー、という表現が古いとか言う指摘はナシの方向で頼む。

というわけで、俺は生きるために洗濯、掃除、その他諸々の家事をこなさねばならない家庭環境にある。

え？お袋？ああ、…今はどこにいるんだっけか…。確か南アメリカの方にいるはずだ。

はずだ、というのは、お袋は察しの通りバリバリのキャリアウーマンで世界をあっちこっち文字通り飛び回っている。たまに妙なポストカードを送ってくるが、それも二ヶ月に一度あるかないかという不定期さで、お袋に溺愛している親父が煩くてかなわん。

たまには帰ってきてくれよな。と、俺が嘆息したところで、

「何か、お悩み事かい？佐久間君」

「……………特に何もねえが、いきなり音もなく背後に回るのはやめてくれ。徳川」

いきなり俺の背後に立ち、そしてかなりの至近距離で話しかけてく

るやや小柄な男子は徳川義道とくがわよしみちという。

何処のミックス武将だよと思うかも知れないが、こいつは別に四百年前に江戸幕府を開いた某將軍の子孫とかそういう漫画チックな奴ではない。これは本人が言っているのだから間違いない。

そんな徳川は俺の返答を聞いて何とも残念そうな嘆息を漏らした。

「そうかい、何か悩みがあるなら遠慮無く言ってくれよ。今なら特別に夢心地に浸れるクスリも付けて、この悪運払いのペンダントを進呈しよう」

「誰がほしがるんだ、そんなペンダント」

徳川が得意顔で取り出したのは、どこぞの裏ネット通販でやりとりをしていそうな悪趣味丸出しのペンダント。しかもそれは金色のもので、ナイフにべったり血のような物がついているというデザイン。つーか、夢心地に浸れるクスリって何だよ。

「うん、良い質問だね。実は今新種のクスリを開発中でその試作品が昨日完成したんだ。僕が試したところ、なかなかの完成度だったから是非君も……………」

「いらん」

俺は瞬時に拒否した。誰がそんな犯罪チックな代物に手を出すか。というか、お前はテスト前日に何をやって……………。

「僕にテストなんて関係ないよ。そんな小さな世界、僕には無縁の話さ」

「そうか、そうか。でもな、今の日本社会それで生きていけるんなら失業者なんてでねえよ」

俺がそう呆れ気味に言い返すと、別の二人組の言い争いが白熱してきていた。

「だーかーらー、何であれでホワイトって読むんだよ!？」

「そんな物は英国の紳士にでも聞いてこい。それか今すぐ英国が造られた時代に飛べ。そして二度と帰ってくるな」

「遠回しに消えろってか？」

お前ら、まだやってたのかよ。次にふと横を見ると次は別の二人組が…

「へえ、格好いいデザインだね」

「おお、技垣君は分かるかい？このペンダントの素晴らしさが！」

「うん、過疎地域のお土産並に格好いいね」

何ていう会話をしていたり…。

それにしても、技垣の奴は顔に似合わずさらっと黒いことを言う。しかもかなり遠回しに言うもんだから、徳川の奴はそれを嫌味だと分かっていないし。

まあ、とにかくだ。俺の日常はこんな感じだったって平凡。

周りの連中が少しばかり変わっているが、ごく普通の高校生、だった。

そう、あいつに出会う、あの夜までは……………。

二、わけがわからない紆余曲折

「何だ、お前。こんな問題もでないのか？」

「うっさい！教える気があるなら教える。それ以外で口きくな」

「んだよ、てめえその態度…ミキサーにかけて近所の猫に喰わすぞボケが」

ツチ、とどこぞのヤーさん並に大袈裟な舌打ちをし、俺の兄貴は席についた。

現時刻、夕食も風呂もとづくに終わった午後九時五十三分。

俺はさすがに昼のテストがやばかったので、珍しく兄貴に教えを請うことにして現在に至る。今の会話で察して貰えたと思うが、俺の兄貴はキレるとその辺のチンピラより質が悪い。

おまけに短気なモンだからどうしろってんだ。

怒らせなければいい話なのだが、何かうざいんだよ、俺の兄貴。

兄弟を持っている人は分かると思うが、無意味にうざくなることがあるのだ。

特に下の弟や妹になるにつれ、兄や姉の良い小間使いとなるのが才子でその幼い頃の記憶がウザさを倍増させていると俺は考えている。

「下らないこと言っていないで、さっさと始めるぞ」

「何でそう急にキヤラ変わるんだよ」

今に始まった事でもないが…。俺は痛む頭を押さえつつ、今日のテスト問題を広げる。

そして分からなかった問題にチェックを入れ兄貴に見せた。

無言で受け取り、黙読する。ちなみに科目は英語。

「っは」

「頼むから、その人を小馬鹿にしたような笑い方をやめてくれ。殺意が湧く」

「お前に俺を殺れるだけの力があんのか？」

ねえな。諦めに近い溜息をつき、俺は頭の後ろで手を組んだ。俺がこうもあっさり負けを認めるのにはいろいろ理由がある。

第一に、兄貴は高校の空手部主将を務めていたことがあり、その実力はかなりのもので全国大会で優勝した経歴の持ち主だからだ。俺も剣道をやっているが、素手となると向こうが絶対的に有利だしな。第二に、精神的な意味でも兄貴に勝てるとは思えない。さっきのドス黒いセリフ聞いただろ？まともな神経してねえよ。

「俺のことをとやかく言う前に、お前は自分の学力をどうにかしろ」
そうやって何やら書き込みがくわえてあるテスト用紙を差し出された。

「お前は基本からできてないんだ。まずは単語を覚えろ。そして基本の文法を頭にたたき込め。発展問題はそれを完璧にしてからだ」

「…兄貴がまともなこと言ってる…」

「ぶん蹴るぞカスが」

うわ、自分の弟をカス呼ばわりしやがったよ、こいつ。

何てことは口が裂けても言えず、俺は礼を言っつて自分の部屋へ引き上げた。

「ったく、兄貴といると疲れるな」

俺はばったりベッドに倒れ込んだ。そして、例のテスト用紙を見つめる。

文法問題にはしっかりどういう理屈でその文章になるのか、熟語が抜けているところはしっかり埋めてあつて意味や使うときの決まり事も書いてある。長文はポイントを押さえてラインが引いてあるし、難しいところは日本語訳までされている。

何だかんだ言つても、良い兄貴だ。

「あのドス黒さがなけりやな」

と、呟いて俺はふと窓を見た。今日は新月だから、月なんか見えやしないけど。と、思いながらも夜空を見上げるのもなかなか青春っぽいよな、なんて

「……………」

そこにあつたのは、人の手首。ベタ、とガラスに押しつけてあり、手首の下はここからでは見えない。

気持ち悪い冷や汗が背中を伝つた。

いやいや、落ち着け俺。

この世に幽霊なるものは存在しないし、化け物も存在しないんだ。そんなものが正式に認められれば、世界の科学者がどうなると思つているんだ。

パニックどころの話しじゃないぞ、よし自己暗示終了。

そして、俺はもう一度窓の外に目を向ける。

目が一つ、ギョロリとこちらを覗いていた。

「ぎゃあアアアア!？」

多分、1メートルぐらい上に飛んだんじゃないだろうか。
そんなことを思うぐらいに俺は驚いた。というかビビった。

これはもう信じる信じない以前の問題だ!

若干腰が抜け気味になっているが、床を這って移動し、俺は部屋の扉に手をかけた。

これで外に出られる!と思った瞬間、勢いよく扉が開いた。
それと同時に俺の顔面に堅い物がぶつかる。

「うっせえエエエエ!」

「げふッ」

そこから入ってきたのは、言うまでもなく俺の兄貴だったり…。

「てめエ、今何時だと思ってるんだッゴラア!」

その様子はもう借金取りのヤーさん並にパンチが効いており、幼児が見れば泣き出すより先に叫び出すんじゃないか、というような極悪面。現に俺は今ちよっと泣きたい。

いやいや、今は兄貴にビビっている場合じゃないな。

「あ、兄貴。窓の外に、人がッ…」

「ああ？」

しかめた顔を窓へ向ける兄貴、しかし、

「んなもんねエじゃねえか」

「いやいや、絶対さつき…あれ？」

確かに、窓の外には何も無い。おかしい、さつきは二度も見たのに…俺は首をひねった。

「なんだてめエ？この程度で俺がビビるとでも思ってたのか？」

ドスのきいた声、ああこりゃそうとういらついでな。まあ、俺が原因なのだが。

それにしても、この場をどうとりつくるおつか。

あったことをそのまま話しても、

「ついに頭のねじが外れたか。ついでにもう四、五十本外すか？」と、握り拳を構えて言われそうで怖いな。よしこは、

「貴様を驚かすためにきまっとるじゃろ、気付け極悪面」

「はア？」

「!？」

兄貴が握り拳を構えて歩み寄ってくる。って待て待て待て！

「言つようになつたじゃねエか…」

「お、俺、何も言っていない！言っていないから！いや、ホントに！」

「ほぞけ」

数分後

「せいぜい己の無力さを嘆けボケ」

「…す、すみません、でした…」

兄貴はそう言い捨てて、俺の部屋を去っていった。

「いつてエ…何で言ってもいないことで殴られなきゃなんねエんだよ…」

見事なまでに急所だけ狙って殴ってきたよ、あの兄貴。
なんとかギリギリ避けていたけど。

「っーか、さっきの声って…」

「にしても痛い！」

「お前も良い兄貴をもっているんじゃない」

「どこが良いいんだよ、あんなヤーさん兄k…って、え？」

振り返ると、そこにいたのは…

「いや、あんなバイオレンス兄貴を持った奴を見るのも、久々じゃな。…そうでもないか、三日前に灯姉弟あかりの一件があったから…よかつたの、あの程度で許す兄貴で」

「灯姉弟って誰だよ、っーかまずお前が誰だよッ!？」

そいつは黒と白の混ざった短い髪をした奴で、左目が完全に前髪で覆われていた。

女が男かよくわからん外見、顔立ち。歳は俺より二つ三つ下といったところか…

そいつは腕を組んでこちらをバカにしたように見ている。

なんだ、こいつは。何でこんな偉そうなんだ、何で仁王立ちなんだ。

そして一番気になるところは…

「念のため聞いておくが…その腰に付けてるのは…まさか本物じゃねえよな？」

そう、そいつは腰に日本刀のようなものを下げていた。

どう見ても飾りではなく、重さもそれなりにありそうな刀…つか犯罪だろ、それ。

俺がそう言つと、そいつはしれつと、

「本物でなければ、どうやって闘うというんじゃ」
「……………」

いかな、俺の耳は日頃のヘッドホンで音楽を聴く習慣によりとうとういかれたようだ。

皆も十分気をつけるよ、俺のようになるからな。

「お前の耳はいかれていない。俺は確かに言った」

ならなおのことやべーよ。俺は頭をかきながらそう思った。

何なんだ、こいつは。人をおちよくって楽しむ質の悪いガキか？

しかし、それにしては…そいつの目は冗談を言っているようには見えない。

というより、どこか圧倒的な力を持っているようにも見える。

って、俺はどこぞのキャラ説野郎か。

まあ、言い訳をするようだが、そこまで大層なものではない。今改めてみるとただの黒い目だしな。

「で、俺に何か用か？ないならとっとと、」

「二年五組出席番号十六番、佐久間祐」

……
マジで何なんだ、こいつ。俺は少しずつイヤな予感がしてきた。

普通、ただの悪戯目的で出席番号まで調べるか？

あらかじめ知っていたという可能性も無くはないが、俺の知り合いにこんな意味不明な奴はいない。はっきり言おう。

気味が悪い。

「まあ、決まってしまったものは仕方がない。お前には、俺の案内人を努めてもらう」

「何言って、」

「俺の口から説明するより、お上から聞く方が早いじゃろう。行くぞ」

「だから、何、ぐお!？」

もの凄い力で服の襟を掴まれた。そして、ベランダの方に連れて行

かれる。

っていうか、ベランダ開けてたからこいつは入ってこれたのか…何で開けっ放しにしたんだ俺のバカ！

「男がそんなことを言っても、可愛くもクソもないじゃろ」

「ほっとけ、っていうか、何でベランダからなんだよ！？」

ここは二階だ。死ぬことはないかもしれないが、完璧に骨折はする。そもそもこいつは俺をどこに連れて行くかというのだろうか…少なくとも、俺が得をするとは思えない。

というわけで、

「行ってたまるか！」

「…」

俺はベッドの脚に捕まり、必死で抵抗する。

もし得体のしれない場所に黙って連れて行かれるような奴がいたとしたら、そいつはよほどのアホだ。そして俺はそこまでのアホではない。

と思いたいが…

「…」

奴は俺を好奇の眼差しで見下ろし、パツと手を離れた。

まるで、新しいおもちゃをもらった子供のような視線…いや、違う。

これはそんな可愛らしいものじゃない！

さしずめいたぶる相手を見つけた性悪野郎が今まさにそれを始めよ

うとするよつな…

「…ッケ」

「は？って、うおー!？」

ドカツという鈍い音が鳴ると同時に、俺は宙を舞った。

しかし、俺の手にはしかとベッドの脚が握られていて…

「ちょ、待ッ!？」

俺はベッドと共に宙を舞っていたのだ。

急激に落下する俺の目の端に、ニヤリとほくそ笑むあいつの姿があった。

それも、サッカーでシュートを決めた直後のような姿勢。こいつ、まさかッ…

ドスン！ベシッ！

「いつてエ…」

ベッドが先に墜落し、俺はその直後に顔面から落ちた。当然、手は離れる。

「…こいつ、化け物かよ…」

さっき、こいつはきつとベッドを真上に蹴り上げたんだ。

そうすれば俺は自然と手を離すだろうしな…。

俺は痛む顔面を押さえつつ、奴の見上げた。

すると、

「鼻血が出てるぞ。何に興奮したんじゃ、中二男子かお前は」
「お前のせいだろうが！」

なに「自分関係ないよ、この人が勝手にしたんだよ」みたいな方向にもっていかうとしてんだ！

「紙やるうか？」
「いらん！」

そんなバカをやっているうちに、階段を駆け上る音が聞こえた。しかも、かなり音が荒い…

「やばい、兄貴が来たッ」
「なら、急ぐぞ」
「いや、だから俺は行かな、ぐげッ」

俺の顔面に見事なパンチが入り、前からやばかった鼻血がさらに出始める。

つか、何半端なく痛い…

「今度こそ、行くぞ」
「…」

俺はもう、何も言わなかった。これ以上鼻血を出すのは御免だ…。そしてここにいて兄貴に殴られるのも御免だ…。やべ、ちよっと泣けてきた。

そんなことを思っているうちに、いつの間にかベランダはすぐそこ。

そして、兄貴の足音もすぐそこ。

「おい、そろそろ…」

と、俺が言いかけたところで、そいつは宙に手をかざした。
そして、何事か呟いた瞬間、

ベランダの外はただの暗闇と化し、隣の家は言うまでもなく、すべての物が消えていた。

「お前…何したんだ…」

「説明はあとじゃ」

そいつがそう言った後は、例にならって襟を掴まれ俺たちは暗闇へ身を投じた。

「…い」

「…おい」

「起きろ鼻血野郎」

「誰が鼻血野郎だ！って、…ここ」

そこはすでに、俺の全く知らない場所だった。というか…

「何なんだ…こいつら…」

起き上がった俺や奴の周りには、人がごった返していた。その半分ほどが妙な剣やら拳銃、バズーカを所持している。かと思えば、不安げな顔、好奇心丸出しの顔、泣きそうな顔、何故か得意げな顔もあつたりして…わけがわからん。

首をひねる俺に対し、奴はあっさりこう言った。

「ここにいる半分は、俺の同業者じゃ。もう半分はお前と同じ案内人^ビ」

「…どういふことか、詳細を話せ」

「俺が話さなくても、今からお上が説明するじゃろう」

俺は痛む頭を押さえた。

まず、突っ込み処が多すぎるところから説明してほしい。

お上って何だ？同業者って、こいつは何をしてるんだ？案内人？観光でもする気か？

「っつーか、鬩いってなんだよ。もうわけわかんねエよ。」

「というような感じでそんなこんなしていると…」

「あーあー、テストス…なっちゃん、聞こえるー？…あ、聞こえてる？え？名前呼ぶな？でも、なっちゃんが確認しろって…え？私語はマイクきってしろ？あはは、もう遅いって」

頭がおめでたそうな二十歳過ぎぐらいの男が、なにやら台のようなものの上がっていた。

「っつーか、どんだけグダグダなテストだよ。」

「直令組の赤崖^{あかがい}じゃ、情報組の夏喜さんも大変じゃな。あんな部下を持って…」

「それよりも、勅令組とか情報組って何だよ」

「直令組じゃ。それもふまえて赤崖が話す。よく聞け」

何で命令口調なんだよ…。

俺はそう思ったが、今の状況を理解するにはそれしか方法がないらしい。

嘆息しつつも、俺は赤崖とやらの言葉を待った。

「まーそういうわけだから、とりあえず皆座ってくれ！」

そう朗らかに笑う赤崖。いろんな意味でただものじゃないな、あの人。

周りの人たちが座り始めたので、俺もそこらへんに適当丸出しで置かれていた椅子に座ろうとした。が、

「座るな」

「あ？何で、」

「うわアアアあああ!？」

「きゃアアアああああ!」

何故か、そこら中から悲鳴があがっている。

俺は冷や汗をかきながら、あたりを見渡した。

辺りには、まるでゴミ箱に座ろうとして失敗し、体がゴミ箱から抜けられないよ状態になっている人が続出していた。

…俺のこの説明でこの状況が伝わっているのかイマイチ自信がない

けどな。一体、ここの責任者は何がやりたいのだろう…。

「赤崖のやりそうなことじゃ。この椅子、軟式ゴムマットでできている」

「軟式ゴムマット？」

奴は腕を組みながら頷いた。

「俺たちの時代の産物じゃ。ゴムを溶かしに溶かし、それを…まあ、理屈は分らんがその特殊ゴムをマット状にし、台のない椅子などに貼り付ける。そしてそれに座ると体が沈み、ああなるんじゃ」

「へエ…って、俺たちの時代？」

そうじゃ、奴はそう言って、俺を真っ正面から見据えた。

「俺たちは、お前達の時代より三百五十年後の未来から来た」

続く…

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4928e/>

迅風一些-ジンプウイッサ-

2010年10月28日08時11分発行